

窯業技術者の朝

中山 享



朝一番の最初仕事が、炉（窯）の扉を開けることという方々が多いのではないかでしょうか。私もそうです。企業から教育機関に移った後も、続いています。緻密体を目標とすることが多いので、炉を開けた瞬間に光沢のある焼結体が目に入ると、最高な一日のスタートになります。嬉しくて、始業前のラジオ体操までに、特性評価を終わらせたことも幾度となくありました。その日の夜には、また新たな成形体を電気炉に詰めて、うまく焼けてくれるようにと祈りながら帰宅していました。朝、炉を開くと、緻密化しなかったもの、単結晶化したかと間違えるほど透明感あるもの、大理石のように多くの亀裂が入ったもの、さまざまの焼成体が得られ、朝からなぜと頭を精一杯回転させ考える機会も多かったです。地方の修士課程を出た後、セラミックスの知識をまったく持たずに窯業メーカーに就職し、窯業技術者として新たな道を歩むことになりました。金属ジルコニウム（ハフニウム）塩素化用の管状電気炉が大学の研究室に1台ありましたが、企業に入ると前方扉の立派な箱型電気炉が何台も揃っており、びっくりしました。ファインセラミックス部門に配属され、すぐに数台の電気炉を使う仕事が始まりました。12年後に教育機関へ移りましたが、半年後には1000℃まで昇温可能な小さな箱型電気炉が購入でき、毎朝炉の扉を開ける環境に戻れました。さらに、幸運にも他学科の若い先生から自分は使っていないので自由に使って下さいと1650℃まで昇温可能な箱型電気炉の扉を毎朝開けられる環境も与えてもらえ、毎日朝が待ち遠しい状況をずっと続けることができました。

現在勤務している教育機関は担任制のため、授業前にショートホームルームを行います。企業時代との大きな違いです。30分ほど早めにショートホームルームに向かい、教室に入ってくる学生さん（今年度は41名、うち女性が30名ほど）一人一人の表情を確認するのが、もう1つの朝の仕事です。雑談も一杯します。昔から「最近の若者は」と言われる方も多いですが、学生さんみんな、しっかりした考えと夢を持っており、斬新なアイデアを生み出し、何事にも精一杯に頑張ります。日本の将来は、明るいと思います。

一方、本協会論文誌への初めての投稿は会社に入って7年後で、入社当時の「窯業協会誌」から「日本セラミックス協会学術論文誌」に名称が替わっていました。近隣に新しく設立された岡山セラミックスセンターの地元若手技術者への支援を受けて実施した、学生時代に取り組んだ複錯塙をヒントにした原子レベルでの均一性に優れた複酸化物の調製についての内容で、日本語での投稿でした。企業時代に掲載された6報以外に、これまでに多くの原稿を査読していただきました。他誌と比較して投稿者に寄り添った建設的なコメントが多く、それに応えることで良い論文に仕上がりしていくのは間違いないと感じています。134年と長い歴史があり、広い分野の基礎研究および応用研究について投稿でき、すでに全文英文化になっていますが日本語で書かれた論文もSupplement号に掲載されるなど、多くの技術者や研究者の研究成果発表の場として、産官学みんなの力で一層活気のある論文誌になることを祈っています。

窯業（焼きもの）、何千以上もの歴史ある世界です。しかし、これから日本を背負っていく若い技術者や研究者にとっては、未知の新しい世界、まだ朝の始まりの段階かと思います。きっと、びっくりするような発見をしてくれ、画期的な製品を生み出してくれるはずです。

みなさま、ご安全！ また、新たな朝を迎えましょう。

なかやま すすむ（新居浜工業高等専門学校 特任教授）
Susumu NAKAYAMA (National Institute of Technology (KOSEN), Niihama College)
Essay - A Ceramics Engineer's Morning

